

九、生き残った人たちの運命

南京大虐殺を研究する複数の学者が陰鬱な面持ちで、東京裁判の後に正義が出し惜しみされたのだと語る。南京の市民を責めさいなんだ日本人の多くが日本政府による十分な軍人恩給と救済を受けているのに対し、何千人もの被害者は沈黙の中で貧困、恥辱あるいは慢性的な肉体および精神の苦痛に耐える日々を送り、今も送りつづけている。

この逆転した正義の転回点は冷戦の出現とともに到来した。当初、アメリカ合衆国は戦争にかかわった日本の指導的な人間を排除して、日本に民主主義を導入しようとしていた。しかし、戦後、ソビエト連邦がヤルタ会談の約束を破ってポーランドとドイツの一部を奪った。東ヨーロッパに「鉄のカーテン」が引かれ、中国にも「竹のカーテン」が引かれた。一九四九年に、毛沢東の共産軍が蒋介石の軍隊を打ち負かし、彼の政府は台湾島に撤退するしかなかった。さらに、一九五〇年に朝鮮戦争が勃発し、その結果、一〇〇万人の朝鮮人、二五万人の中国人、そして三万四千人のアメリカ人が殺された。中国、ソビエト連邦、そして北朝鮮という戦後の新しい敵を前にしたとき、アメリカ合衆国は、突然、日本を戦略的に重要な国と見るようになった。アメリカ合衆国は日本の戦前の官僚機構を実質的に手つかずのま

ま残し、戦争犯罪に加担した多くの人間が罪を問われず見逃されることを承認した。このようにして、ナチの体制が解体され作り変えられ、多数のナチの戦争犯罪人が追跡されて裁かれたのに対し、日本の上層の戦争犯罪人の多くは権力に復帰し、成功者になっていった。一九五七年に、日本はA級戦争犯罪人の嫌疑を受けて拘留された男を内閣総理大臣に選出した。

同じ時期に、南京大虐殺の犠牲者のすべてでないとしても、ほとんどが、公衆の視線から見えなくなつた。冷戦と荒れ狂つた毛の治世の日々の間、南京は、中国の他の地区と同様に、国際社会のほとんどから隔絶された世界だつた。中国の共産主義政権は、数十年の間、西側との連絡を切断しただけでなく、南京安全区の管理者として何千もの命を救つたはずの、南京に残つていた外国人のほとんどを追放した。一九九五年の夏に、私は南京大虐殺の生存者の口述する証言をビデオテープで撮影するために西側から中国を訪れた最初の人間の一人になつた。悲しいことだが、もし私が一〇年早く南京を訪れていたら、私は大虐殺の現場を完全な状態で見ることができたはずである。当時、市は歴史保存のモデルになつて、一九三〇年代の建物の多くがまだ残つていた。しかし、一九八〇年代末から一九九〇年代にかけて、市は狂乱的な土地投機と建設ラッシュに見舞われ、古い景観は破壊され、新しい豪華なホテル、工場、高層ビル、そして集合住宅が濃いスモッグに覆われている光景に変わつていった。有名な南京の城壁もほとんどが姿を消し、数少ない城門が観光客の呼び物として残されているだけだつた。

もし私が、このはちきれんばかりに密集し繁栄している都市を訪れる前に南京大虐殺について知つていなかったら、そのようなことが起こつたということを想像することもできなかっただろう。市の人口は、大虐殺直後に比べると少なくとも一〇倍に増大していた。しかし、繁栄の陰に、人々の視線から隠

れるように、過去に繋がる最後の人間の絆、南京大虐殺の生存者たちがいた。市の学者たちが、南京市内各地に分散している生存者たちの何人かの家へ私を案内してくれた。

私は彼らの生活を見て衝撃を受け落胆した。ほとんどの人は、暗い、むさくるしいアパートの、ガラクタが散乱する湿気の多い黴臭い部屋に住んでいた。大虐殺のときあまりにも酷い傷を負った人たちは、その後の何十年間、満足な生活を送ることができなかつたことを私は知らされた。多くの生存者の暮らしは貧困に押し潰されていくかようだった。日本から最低限の金銭的な補償があれば、その生活を大きく改善できたはずである。日本からの一〇〇ドルの補償で空調機を買えば、彼らの多くは別の世界を見ることができたのである。

戦争のあと、生存者の一部は政府が自分たちを擁護して、日本の補償と正式な謝罪を要求してくれるのではないかという希望に執着した。しかし、中華人民共和国政府が国際的な正統性の承認を得るために、日本との同盟関係の確立を切望し、さまざまな機会で日本を許したと宣言したことで、この希望はあつという間に打ち砕かれた。一九九一年に、中華人民共和国の政府は日本の首相を中国大陸に招待した。そのようなニュースを聞くことは、二回目の強姦を受けるようなことだったし、自分たちは二重の裏切りの犠牲者なのだと思える人もいた。一度目は陥落直前に南京から逃亡した国民党の兵士に、次には、自分たちの未来を日本に売り払った中華人民共和国政府に。

国際人権問題に携わってきた弁護士のカレン・パーカーによれば、中華人民共和国は、日本向けの懐柔的な声明を何度も発表したとはいえ、戦争犯罪に対する国家補償を放棄する条約には決して署名してはいないという。さらに、たとえそのような条約が結ばれていたとしても、強行規範（ユス・コーゲン

ス)の原理により、戦争時に被った被害の補償を中国人が個人として請求する権利を否定することはできないとパーカーは主張する。

しかし、私が南京で話した生存者のほとんどは国際法の細かい規定を知らず、中華人民共和国はすでに補償の請求権を喪失していると信じていた。中国政府と日本政府の友好関係を伝えるニュースは、常に彼らの気持ちを逆撫でにするのである。南京大虐殺のときに日本人に焼き殺されそうになった一人の男性は、中華人民共和国が日本の過去の犯罪を許すという噂を聞いたときには、自分を抑制できなくなつて嘆き悲しんだと言つた。南京大虐殺で父親を処刑された別の女性は、日本の首相の訪問のニュースをラジオで聞いたときに、母親が氣を失つたと話した。*

※ しかし、南京大虐殺の生存者のすべてが悲劇的な運命に見舞われたわけではない。ときに私は、唐生智司令官のその後の人生のような、数多くの驚くような結末を発見する。南京での大失敗にもかかわらず、中国で唐は魅力的な存在でありつづけた。はじめのうち、世間は彼に厳しかった。南京の大敗走のために、国民党内での彼は汚名にまみれ、官職を退いて故郷の湖南省に戻らなければならなかった。しかし、共産主義者が権力を握つた後、彼は敵側の軍高官であつたのにもかかわらず、新しい指導部は彼を受け入れた。唐は瞬く間に頭角を現し、湖南省人民政府副主席を務め、全国人民代表大会、国防委員会、中国国民党革命委員会など数多くの組織の委員になつた。長い名声に富んだ政治生活の後、一九七〇年四月六日の死により崇敬を集める公的な地位を終えたとき、彼は八〇代だつた。

同じくらいに暗い気持ちにさせるのは、南京安全区を組織した外国人の多くがたどつた運命である。彼らは自分の力と健康を犠牲にして南京の中国人を救済したのに、これらの西欧人のほとんどは、生前

においても死後においても、彼らの行為にふさわしいものをまったく受け取っていない。この忘れられた第二次世界大戦の英雄たちに捧げられた著名な書物は存在しないし、「シンドラーのリスト」のように彼らの姿を人々の心に生き生きと呼び起こすような映画も存在しない。彼らの精神は主にベルリンからサニーヴェールまでのわずかな記録庫と屋根裏、そして彼らのことを、自分たちを救ってくれた、生きている仏として思い出すひと握りの生存者の心の中に生き続けているだけである。

多くの南京の生存者は安全区の指導者たちの行為を知っているが、その人たちの人生の最後がどのようなものであったかを知る人はほとんどいない。中国で私が会話を交わした生存者たちは、彼らを護ってくれた人たちの何人かが汚名を着せられて中国から追放されたこと、母国で尋問され社会的に葬り去られたこと、回復できない身体と心の傷を負ったこと、そして、自殺にまで追い込まれた人もいることを知ると、悲しんだ。これらの英雄の何人かは、南京大虐殺のあとからの犠牲者と考えることができる。

マイナー・シール・ベイツとルイス・スマイスの経験は、南京大虐殺の時期の彼らの英雄主義的な行為の事実が、政治的な目的のためにどんなにか歪曲されてしまうのかを示している。朝鮮戦争の間、中華人民共和国では大虐殺の歴史を歪め、新聞はアメリカ人が日本人の虐殺を手助けした悪人であるかのように描いた。ルイス・スマイスは、安全区の外国人が日本人に都市を譲り渡し、何千人もの女性を強姦させたと言って、彼らを非難する地方の新聞の記事を見た。同じような論調で、国営の「新華月報」の記事は、一九三七年に南京に残ったアメリカ人は「アメリカ政府の帝国主義政策に応じただけでなく、彼らの企業、教会、学校、および住居を中国人の血と骨によって守っていたのだ」と告発していた。記事の筆者は、安全区委員会は日本の侵略者と「忠実な共謀関係」で活動した帝国主義者の組織だったと

主張し、中国人の生存者の言葉を引用していた。「アメリカの悪魔が名前を呼び、日本の悪魔が処刑した」。大虐殺の絵が印刷され、「南京大虐殺を忘れるな、アメリカによる日本の再軍国主義化を阻止せよ！」というスローガンが書かれていた。

彼の中国語の教師は彼の安全を保証したが、このプロパガンダにスマイスは衝撃と恐怖を感じた。「スマイス博士、市内にはあなたが人々のために何をしたかを知っている一〇万人の間がいるのです。何も悩むことはありません」。中国語の教師が言った。しかし、彼が南京で過ごす残りの日々は多くなかった。一九五一年に、彼は南京大学の職を辞し、翌年、ケンタッキー州のレキシントン神学校の教職に就いた。ペイツも南京を去ったが、一時、共産主義者により軟禁状態にされたのちのことである。

スマイスとペイツが受けた苦難は同僚の何人かが受けたものほど大きくはなかった。委員会のメンバーのあるものは、大虐殺によって命を削られた。ジョン・マギー牧師の息子のデイヴィッド・マギーは、日本人との折衝のストレスが父の早過ぎる死の原因だったと確信している。他の安全区指導者は、何年もの間、心理的な苦悩を耐え忍ばなければならなかった。たとえば、YMCA書記ジョージ・フィッチの娘エディス・フィッチ・スワップは、彼女の父が南京での日本人の残虐行為のために強い心的外傷を負ったために、その問題についての講演をするときに、しばしば完全な記憶喪失に陥ったと話した。このようなことは、少なくとも二回、フィッチがアメリカ合衆国の大きな組織の前で日中戦争について講演しているときに起きた。

南京大学病院の外科医ロバート・ウィルソンは南京での活動のために自分の健康を代償に支払った。彼の未亡人は、安全区委員会の他の医師たちが注意深く自己管理して、毎週一度は、睡眠をとるために

上海に行っていたのに、ウイルソンは無分別に休息を取らず、働きつづけたことを思い出す。昼間の外科手術は、彼の精力のほとんどを使い果たし、夜には日本兵が彼の睡眠を中断させた。彼は夜に何度も家から呼び出され、まさに行われている強姦をやめさせた。彼はアドレナリンだけに支えられて手術をしていたようである。最後には、彼の身体がもたなかった。一九四〇年、彼は激しい発作に襲われ、精神的にも衰弱したために、アメリカ合衆国に戻らざるを得なくなつた。彼はカルフォルニア州のサンタバーバラで一年間過ごした。その後、中国には二度と戻らなかつた。また、彼は一生、過労から回復することができなかつた。アメリカ合衆国で、ウイルソンは発作と悪夢に悩まされただけでなく、朝、目の焦点を合わせるができなくなることがあつた。

ミニ・ヴォートリンは自分の命を代償として支払つた。大虐殺は、他の安全区の指導者や難民たちが考へていたよりも遙かに深刻な心理的代償を彼女に負わせていた。神話になろうかという伝説の下に、傷つきやすい、疲れきつた女性がいて、毎日、直面させられていた日本人の暴力のために、感情的にも、心理的にも回復することができなくなつていたのだということに気づく人はいなかつた。一九四〇年八月一四日の彼女の最後の日記を読むと、彼女の心の状態がはつきりと見えてくる。「私の力はもう終わつてしまつているようだ。そこにあるすべての手が、障壁のようなものになつているみたいで、もう、前を向いて、仕事をしようと計画することもできない。私はすぐに休暇に入れればいいなあと思うが、誰がE X P コースを考へるのだろうか?」

二週間後に彼女は神経衰弱に襲われた。彼女の日記の最後のページの最下行には、明らかに彼女以外の誰かの手で書かれた一文がある。「一九四〇年五月、ヴォートリン女史の健康が破壊されたので、彼女

はアメリカ合衆国に帰らなければならなくなった」。彼女の姪は、ヴォートリンの同僚が彼女を治療するためにアメリカに送り返したが、太平洋を横断する航海の途中で、彼女が何度も自殺しようとしたことを思い出す。ヴォートリンに付き添っていた友人は、彼女が船から身を投げようとするのを、必死に制止した。アメリカ合衆国に戻ると、彼女はアイオワの精神病院に入ったが、そこで電気ショック療法を受けた。退院後、ヴォートリンはインディアナポリスの連合キリスト教宣教伝道社へ働きに行った。ミシガンのシェパードに住んでいた彼女の家族はヴォートリンに会いに行こうとしたが、彼女はすぐに自分から会いに行くという手紙を書いて思いとどまらせた。それから二週間後に彼女は死んだ。南京を去ってから一年後の一九四一年五月一四日に、ヴォートリンはドアと窓にテープで目張りをして、ガスの栓を開き、自殺した。

さて、ジョン・ラーベの運命である。長い間、彼の人生は歴史家の謎だった。召喚されてドイツに戻る前に、ラーベは南京の中国人に、彼の母国で日本の残虐行為を公表し、ヘルマン・ゲーリングへの謁見を求め、できればアドルフ・ヒトラーにもそうすると約束した。南京の人々は、ラーベの訴えかけがナチの指導者を動かし、日本政府に圧力をかけて大殺戮をやめさせることができると祈った。ラーベが発する前に、中国人の医師が、中国人は共産主義者ではなく平和を愛する国民で、ほかの国々と協調して生きていきたいと望んでいるのだとドイツ人に話してくれるようラーベに頼んだ。一九三八年二月の感動的な送別会の後に、ラーベはマギーの南京大虐殺の映画フィルムを持ってドイツに向かった。その瞬間から、彼はすべての記録から姿を消し、彼のその後は、何十年もの間、歴史家を悩ませるものだった。

私がこの詳細を突き止めようと決心したのは、二つの理由からである。第一に、心優しきナチ党員がアメリカ人の宣教師と協力し合つて日本兵から中国人難民を救つたという逆説めいた話が、私にはあまりにも興味深く、見逃せなかつたからである。そして第二に、私はラーベがドイツに帰国した後、彼の身に何か恐ろしいことが起こつたのに違いないと確信したからである。いずれにしろラーベは、彼の同僚たちとともに南京の恐怖を証言する機会であつた極東国際軍事法廷にも現れなかつた。また、彼の友人の一人とのインタビューでは、ラーベがヒトラーの政府との間で何らかの衝突を起こしたらしいということが推測された。しかし、その友人も特別に詳しいことを語つてくれなかつたし、私が文献を見つけたときには、もう彼は生きていなくなつたので本人からすべての話を聞くこともできなかつた。

あらゆる方向の疑問が私の頭の中を駆け巡つた。ラーベは本当に映画フィルムと上申書をヒトラーに見せたのだろうか？ あるいは、とんでもないことだが、彼はナチの機構に深入りして、ユダヤ人の絶滅に加担したのだろうか？（彼の南京における英雄的な行為を考えると、私はこれをほとんど信じるこゝとができなかつたが、可能性がないわけではなかつた）。彼は戦争のあとで投獄されたのかもしれない。あるいは、誰も彼の消息を知らないのは、彼が法からの逃亡者になつて余生を中南米のどこかの国で過ごしたからなのかもしれない。また、私は彼が南京大虐殺の個人的な日記をつけていたのかどうかも気になつた。しかし、たとえば彼がそのような文書を持っていたとしても、それは戦争の間に、空襲で焼けてしまつて失われたに違いない。そうでないとすれば、そのような日記はすでにどこかの図書館に保管され、世界中の人が利用できるようになつてはいるはずである。それでも、私はドイツに手紙を書いて、何でも見つかれるものを求めることで悪くなることはないと考えた。

私はラーベに関する重要な手がかりを知っていた。世紀の変わる時期に、彼はハンブルクで徒弟修業をしていた。多分、彼はそこで生まれたのだろうし、その市内には彼の家族がまだいるはずである。私はなんとかしてハンブルクの鍵を握る情報源と接触しなければならなかった。私は古い友人に助けを求めた。研究者たちに「国家的な宝」と呼ばれているジョン・テイラーである。彼は半世紀以上もワシントンDCの国立公文書館に勤め、世界中の重要な歴史家に関することをすべて知っていた。もしも、第二次世界大戦の時期の中国におけるドイツ人社会の歴史について何らかの研究をした専門家がこの惑星の上にいるのならば、おそらくテイラーはそれが誰だか知っているはずである。テイラーはカルフォルニア州フアンデイルの歴史家チャールズ・バーディックに連絡したらどうかと示唆した。次に、バーディックはハンブルクの市の歴史の研究者に手紙を書いたらどうかと示唆した。彼はまた、彼の友人のマーサ・ビージマンの住所を教えてくださいました。彼は彼女について、市についての詳しい連絡網を持っているだけでなく、喜んで協力してくれる「素晴らしい淑女」だと保証してくれた。数日の間に、私はラーベの謎についてビージマンに手紙を書き、ハンブルク最大の新聞社の編集者にも手紙を書き、その手紙で私の調査が進展することを期待した。とはいえ、どちらからもそれほど早く返事がくるとも思えなかった。私は別のことに注意をむけようとした。

驚いたことに、ビージマンからの返事はすぐに送られてきた。偶然な出来事の連鎖を経て、彼女はすでにラーベの家族を見つけ出していた。「私はあなたに協力できて幸福です。しかし、それほど難しいことではありませんでした」。彼女の一九九六年四月二六日付け手紙は言う。「最初、私はバイエルンのパスター・ミューラーに手紙を書きました。彼は以前中国にいたドイツ人の消息を集めています。何日

かして、彼はすぐに電話をくれて、ジョン・ラーベの息子のオットー・ラーベ博士と、彼の妹のマルガレータの名前を教えてくださいました」。彼女は手紙に、ベルリンに住んでいるラーベの孫娘ウルスラ・ラインハルトからの伝言を同封してくれた。

その瞬間から、物事が急速に動き出した。ウルスラ・ラインハルトは中国で生まれ、少女のときに、陥落の数ヶ月前の南京に行ったことがあるということを知った。彼女はラーベお気に入り孫娘だった。有難いことに、ラインハルトの協力は私の調査にとつて限りなく有益で、彼女は沢山の長い手紙を私宛に送ってくれた。ラインハルトが送ってくれた手書きの文章、写真、新聞記事は、ラーベの人生の失われた記録のかなりの割合を充填してくれた。

ラーベは、日本人による南京の恐怖をドイツ政府の当局に知らせるといふ中国人との約束を守っていた。四月一五日に、彼は妻とともにドイツに戻り、その業績に対して多数の荣誉を受けた。ベルリンでは、ドイツの国務長官が中国におけるラーベの努力を公式に称賛した。ラーベは赤十字級の勲功十字章を贈られた。シュトゥットガルトでは、さらに銀板ドイツ功労賞を受け、中国政府からは、宝光嘉禾章を贈られた。その五月に、ラーベはジーマンス本社、外務省、極東協会、そして国防省の各会場で、一杯に集まった聴衆の前で講演し、ジョン・マギーの映画フィルムを上映して、南京大虐殺についての情報を公表した。しかし、ラーベはアドルフ・ヒトラーに拝謁することはできなかった。そこで、六月八日に、彼は総統宛てに手紙を送り、映画フィルムとタイプした南京大虐殺についての上申書を同封した。

だが、ラーベがヒトラーから同情的な返事を得られると期待していたとすれば、彼は重大な誤りを犯

していたことになる。数日後、ゲシュタポの二人の捜査官が彼を逮捕するためにやつてきた。ウルストラ・ラインハルトはそのときにそこにいた。彼女が七歳のときで、ドアの近くで新しいローラースケートに乗ろうとしていたとき、白い襟の黒い制服を着た役人風の男たちが、ラーベを外で待つている自動車の方に連れて行くのを見た。「祖父は当惑しているようでした。二人の男はとても厳しく険しい表情だったので、祖父に別れの挨拶をすることもできませんでした」。

ラーベはゲシュタポの本部で数時間尋問された。ゲシュタポが彼を釈放したのは、雇用主のカール・フリードリッヒ・フォン・ジーマンが彼の人柄を保証し、ラーベが日本のことを表立って話すことを控えさせると約束したからだだった。ラーベはこの問題について、二度と、講演も、議論も、執筆もしないようにと、そして、特に、ジョン・マギーの映画フィルムを誰にも見せないようにと警告された。ラーベの釈放後、ジーマン社は、彼を保護するためだったのであるか、すぐに外国に派遣した。その後の数ヶ月間、ラーベはアフガニスタンで働き、ドイツ国籍の人間がトルコを通って国を離れることを補助していた。一〇月になってからドイツ政府は彼の報告書を送り返してきたが、ジョン・マギーの映画フィルムは戻らなかった（ラーベはヒトラーが上申請を読み、映画を見たのかどうか確かめることができなかった。しかし、現在、彼の家族は見ただろうと確信している）。ドイツ政府はラーベに、彼の上申請は教育省に送られ、そこで政府の高官たちがそれを読んだが、そのことによつてドイツの日本に対する外交政策が変わることを期待してはいけなないと通告した。

その後の数年間はラーベにとつて悪夢のような日々だったことは間違いないだろう。彼のアパートは、空爆され、ロシア軍がベルリンに侵攻したために、彼の家族は窮迫した。ウルストラ・ラインハルトは、

彼らがベルリンのソビエト占領地区ではなくイギリス占領地区にいたから、生き延びられたのだと確信している。ラーベはジーマンス社で経済記事を英訳して、不定期に仕事をしていた。しかし、低賃金のために、家族の生活は苦しかった。

連続して告発を受けた戦争直後の時期は、ラーベにとって長い腹立たしい日々だったに違いない。まず、ラーベはソビエト当局に逮捕され、仮借ないアーク灯のまぶしい光の前で三昼夜にわたって尋問された。次に彼はイギリス当局に逮捕され、イギリス当局は彼をまる一日締め上げたが、のちに彼に労働許可を与えた（しかし、ジーマンス社が依然として恒久的な職を用意しなかったので、この労働許可はラーベにとってあまり価値のないものだった）。最後の屈辱を受けたのは、知人によって弾劾され、長い「非ナチ化」処置が始まったときだった。彼は自分の法的な弁明のために費用を払わなければならなかった。彼は、この過程で労働許可を失い、貯えも精力も使い果たしてしまった。ラーベは、家族とともに狭い一部屋の中で、寒さと飢えに苦しんだ。そして、豆や、パンや、石鹼を買うために、大事にしていた中国の工芸品の収集品をアメリカ兵に売らなければならなかった。栄養不良のために皮膚病に冒され、悲嘆とストレスのために彼の健康はほとんど破壊されてしまった。南京では彼は伝説だったが、ドイツでの彼は生ける屍だった。

一九四五年から一九四六年にかけてのラーベの日記の抜粋を見ると、彼の精神状態が明らかになる。

ジーマンスに仕事はない。——私は失業者だ。……軍政府の命令により、私はシュパンダウ（ベルリンの北西地区）のシュタット・コントールバンクに、私のスタンダード・ライフ保険証券

を登録しなければならぬということだ。私が長年働いて貯えた一〇二七・一九ポンドの（五千ポンドの残り）保険証券はビュンデのグレーテル（マルガレーテ、彼の娘）の所にある。私は銀行の領収書を渡した。もう、この金はなくなつた！

前の日曜日はマミー（ドーラ・ラーベ、ジョン・ラーベの妻）と一緒に、クサンテナー通り（砲撃されたラーベのアパート）にいた。私たちの地下室のドアが壊され、私のタイプライターと私たちのラジオとそれ以外の多くのものが盗まれた——マイヨウフレイツ 没有法子！

今、マミーの体重は服を着たままでも四四キロしかない。私たちは、非常に痩せてしまった。夏が終わる——冬はどうなるのだろうか？ どこで食べ物と燃料と仕事を見つければいいのだろうか。私は今、ティンパレイの *What War Means*（南京大虐殺について記録した本）を翻訳している。これは今すぐには金にならないが、ひよつとすると、もう少しましな食糧配給券を得られるだろう。……すべてのドイツ人が私たちと同じような境遇だ。

私たちは、ずっと空腹だった。——何も話すことはないから、何も書かない。貧しい食事に加えて、どんぐりの粉のスープを食べた。マミーが秋にこつそりとどんぐりを集めておいたのだ。その貯えもなくなつてきたので、くる日もくる日もイラクサを食べている。ほうれん草のような味がする。

昨日、非ナチ化の嘆願が拒否された。私は南京安全区国際委員会の責任者として二五万の中国人の命を救ったのに、私が短期間だけ南京の国家社会主義ドイツ労働者党の地区指導者だったことと、私のような知的水準のものはあの党の党員になろうとしてはいけなかったということ、私の要求は拒否された。控訴しよう。……もし、彼らが私にSSW（ジーマンス・シュッケルト・ヴェルク、ラーベの会社の名前）で働く機会をまったく与えないのなら、私はどうやって生きていけばいいのか分からない。私は戦いつづけなければならぬ。―それにしても、私はひどく疲れてしまった。今、私は、毎日、警察官に尋問されている。

私が中国でナチの虐殺を聞いていたら、私は国家社会主義ドイツ労働者党に入らなかつた。そして、もしドイツ人としての私の意見が南京の外国人たちと衝突していたら、南京のイギリス人、アメリカ人、デンマーク人などの人たちは私を南京安全区国際委員会の代表に選ばなかつただろう。南京では、私は数十万人の人々の生きていくに助けた。そしてここでは、私は「最下級民」でのけ者だ。おかげでホームシックも治ってしまった。

六月三日に、シャーロットテンブルクのイギリス地区の非ナチ化委員会によって、私はとうとう非ナチ化された。判決はこうだ。「あなたは国家社会主義ドイツ労働者党の地区指導者の代理だったうえ、ドイツに戻ったのちも、国家社会主義ドイツ労働者党の党籍を離れなかつた（ウルスラ・

ラインハルトは、そうすることは自殺することだったと注記した）けれども、あなたが中国で行った人道的な仕事を考慮して、委員会はあなたの異議を支持することに決めました」云々。

これにより、神経の拷問は終わった。私はSSWの多くの友人と重役に祝福され、会社から緊張を解きほぐすための休暇を認めてもらった。

今日、マミーは私たちの中国の木像をもってクレブ博士のところに行つた。彼は私たちに食料を提供してくれ、そしてこの像をほしがっていた。中国の孔にプレゼントされた中国絨毯、これは三〇〇ポンド（約二五〇キログラム——訳者）のジャガイモのお礼として、トウプファー夫人に贈つた。

一九四八年ごろ、ラーベの苦境のニュースは中国に伝わつた。南京市政府が市民たちにラーベが助けを必要としていることを知らせたときの反応は恐ろしいほどで、ほとんどフランク・キャブラの古典的な映画「素晴らしき哉人生」の結末を思わせるものだった。何日かのうちに、大虐殺の生存者たちはラーベを援助するために中国の貨幣で一億元を工面した。これは、ざっと換算して当時のアメリカドルで二千万ドルに相当する金額だった。一九四八年当時の貨幣価値としては、決して小さな金額ではない。その年の三月に、スイスに旅行中だった南京市長が、大量の粉ミルク、ソーセージ、お茶、コーヒー、牛肉、バターそしてジャムを購入し、四個口の巨大な包装箱にまとめて、ラーベに配送した。一九四八年の六

月から、首都が共産主義者の手に落ちるまで、南京市民は毎月大量の食料をラーベに郵送して、国際安全区委員会の指導者の役割への心から感謝の気持ちを表した。国民政府は、中国の住宅をラーベに無料で提供し、中国に戻った場合には終身年金を支払うと申し出た。

荷物はラーベと彼の家族にとって、天の助けだった。一九四八年の六月にラーベから大層なお礼の手紙を受け取った南京市民は、ラーベがどんなにひどい状態の中で、援助を必要としていて、それを受け取ったのかを知った。その手紙は現在も中国の公文書館に残っている。荷物が届く前には、家族は野生の雑草を集めて子どものスープにしていた。大人はほとんどパンだけを食べて何とか生活していた。ラーベは南京への手紙の中で、ベルリンの市場からはパンさえもが姿を消しているので、受け取った荷物は彼らにとつてますます貴重になったと書いた。彼の家族全員が、南京市民の援助に感謝した。そして、彼自身でこの贈り物によって人生の信念を取り戻すことができたと言った。

ラーベは、一九五〇年に脳卒中で死んだ。彼は死ぬ前に、中国における彼の活動を記述した遺産を残した。それは、南京大虐殺に関する二千ページを超える文書で、正確にタイプされ、番号を振られ、綴じられ、凶解も添えられていた。これらの文書には、彼と他の外国人の証言の報告書、新聞記事、ラジオ放送、電報、そして虐殺の写真が含まれていた。疑いもなく、ラーベはこの記録の歴史的価値を理解していた。多分、彼は将来これが出版されることを予想していたのだろう。彼の死から一〇年後に、ウルスラ・ラインハルトの母親が彼の書類の中から日記を見つけ、彼女に譲ろうとしたが、その申し出は時期が悪かった。ラインハルトはそのとき妊娠していて、また学校の入学試験の準備に没頭していた。それ以上に重要だったのは、彼女は身の毛のよだつような内容の日記を読むのが怖かった。彼女が丁寧

に申し出を断ると、ジョン・ラーベの息子オットー・ラーベ博士が代わりに書類を相続することになった。彼が所蔵した書類は、世界の人々はおろか、ドイツの歴史家にも知られずに、半世紀が過ぎた。

書類が秘密の存在だったことの理由として、いくつかのものが考えられる。ラインハルトによれば、ジョン・ラーベ本人が息子に日記の存在を公開しないように警告していた。彼がゲシュタポで受けた扱いは、彼をこのように慎重にさせる原因の何かがあると言えるかもしれない。しかし、家族が日記の存在を明らかにすることを嫌うもつと根本的な原因があった。ラーベの前ナチ黨員という経歴を家族の何人かが気にしていたことは理解できるし、戦争直後の時期にはナチ黨員の文献を出版したり、あるいは彼の成し遂げたことを誇ることは、価値があるものだととしても、単純に政治的に正しくないことだった。

南京安全区委員会のほかのナチ黨員も、同じように彼らの記録については沈黙を守り続けていた。ラーベの文献の発見の少し後に、私は南京大虐殺に関するほかのナチ黨員の日記の存在を知った。それは *Days of Fate in Nanking* (南京の運命の日々) と題されたクリスチャン・クレীগーの日記だった。彼が九〇代で亡くなった後に、息子のピーター・クレীগーが、父親の机の中の日記を発見した。彼は私への手紙で、私の手紙が届いた時期が幸運だったと書いている。私の手紙が一ヶ月早く届いていたら、彼は私にこの問題に関して父親はいくつかの新聞記事を保存していただいただけだと答えただろう。現在に至るまで、彼は父親が南京大虐殺や日記について、なぜ彼に一言も話さなかったのか不思議に思っている。私は、その理由が、ヒトラーに大虐殺の報告書を送った後にラーベが転落し、取調べを受けたことと関係しているのではないかと思う。事実、日記の最下行には、クレীগー自身の筆跡で、次のような手書

きの警告文がある。「ヒトラー政権の現在の見解に反する。結果として、私はこれに対して非常に慎重でなければならぬ」。

最終的に、ラーベの英雄的な努力を世界に訴えたのは、ウルスラ・ラインハルトだった。私の手紙が彼女に届いたときに、彼女は日記を詳しく調べてみるべきだと決断した。彼女は伯父から文書を借り、自分自身を奮い立たせてそれを読んだ。その内容は彼女が予測していた最高の荒々しさを遙かに超えて暴力的だった。南京での、公道で日本兵によって強姦された女性たちの描写や、生きたまま焼かれた犠牲者の描写は、彼女をひどく動揺させた。数ヶ月経っても、彼女には祖父の報告書を読んだ恐怖が強く残っていたので、「人民日報」の記者に南京大虐殺についての自分の正直な意見を述べるのに躊躇はなかった。その意見は、確実に激しい論争を煽り立てるものだった。南京の犠牲者に対する日本人の拷問は残忍さにおいてナチを超えている。日本人はアドルフ・ヒトラーよりも悪かった。

ラインハルトは日記を世界に公開することについて悩んでいた。彼女は、その日記が中国と日本の関係を破局に陥らせる可能性をはらむ政治的爆弾だと考えていた。しかし、私にせきたてられ、南京大虐殺の犠牲者を記念する同盟の前会長で国連で勤務したことのある邵子平シャオピンにもせきたてられ、彼女は日記を公表することを決断した。彼女は一五時間かけて、それを複写した。日本の右翼が彼女の家に押し入って日記を処分してしまうのではないか、あるいは家族に莫大な金額を提示して原本を買収してしまうのではないかというようなことを危惧した邵は、大急ぎでラインハルトと彼女の夫にニューヨーク市に来てもらい、こうして日記はエール大学神学大学院に寄贈された。そのときの記者会見は、一九九六年二月一二日、南京陥落の五九度目の記念日に、まずニューヨーク・タイムズの卓越した記事によって紹

介され、続いてABC・TVのピーター・ジェニングス、CNN、およびその他のメディアで取り上げられた。

歴史家たちは異口同音にこの日記の価値の高さを認める見解を述べた。多くが、この日記は南京大虐殺が現実起こったのだということのさらに決定的な証拠であると考え、それがナチの視点から語られていることが魅力的だった。ラーベの説明はアメリカ人による虐殺の報告が真正なものであることを裏付けた。そもそもナチ党員には虐殺の話を捏造する動機がなかったのだが、それだけでなく、ラーベの日記には英語からドイツ語に翻訳されたアメリカ人の日記が含まれていたが、それは原文と一語一語対応していたのである。中華人民共和国では、「人民日報」に書かれた研究者の記事で、この文献が現存する大虐殺の中国語の一次資料と照合され、相互に補強されたと伝えられた。アメリカ合衆国では、ハーヴァード大学の中国史教授ウィリアム・カービーがニューヨーク・タイムズに語った。「これは、膨大な数の詳細な記述や事件が注意深く集められた、信じられないほど魅力的だが憂鬱な物語だ。これは、この事件の入口を、人々が日々の会話の中で確かめることができるような新しい方法で、再び開くことになるだろう。そして、すでによく知られているものに、百から二百の話を付け加えるだろう」。

日本の歴史家でさえも、ラーベの発見が重要なものであると表明している。笠原十九司都宮大学教授（中国近現代史）は、朝日新聞に語った。「当時、現地にいたドイツ人による初めての記録としての史料価値だけでなく、ヒトラーに訴えていたことの意味も重要だ。ラーベのような立場にある人間が、日本の同盟国の最高指導者にあえて訴えたこと自体、大虐殺の存在を裏付けるものだ」。秦郁彦千葉大学教授（日本現代史）が付け加えた。「日本の友好国だったドイツ人が客観的に当時の状況を描写してい

る。その意味で、当時から日本への反感が強かったとされる米国人牧師の証言よりも史料的な価値は高いと思う。当時のドイツは、中国と日本のどちらの側につくか迷っていた。だが、三八年にリッベントロップが外相に就任後、急速に対日提携が進んだ。そんな時期に、ヒトラーに直訴を試みたラーベの勇氣には驚く」。